

探究学習の現場から

第8回 宮崎県立都城西高校

▶ 設立：1962年 ▶ 種別：全日制／普通科・フロンティア科／共学 ▶ 生徒数：1学年約240人
 ▶ 校訓に、理想(Ideal)、優雅(Grace)、自主自律(Independence)を掲げる
 ▶ 2022年度合格実績(現役のみ)：国公立大は、宮崎大、鹿児島大、大分大、熊本大、福岡教育大、広島大、九州工業大、宮崎公立大などに49人が合格。私立大は、法政大、関西大、近畿大、西南学院大、福岡大、南九州大、宮崎国際大などに延べ199人が合格

地元企業をメンターに 地域課題を解決する グローバル人材を育成



探究プログラム開発推進委員会主任

外山 真樹

とやまさき ● 教員歴25年目。宮崎県教育委員会を経て、2021年度に赴任。探究活動に取り組み始める。担当教科は生物。

地域の課題解決を通じて 進路選択の幅を広げる

本校は、グローバルに活躍する生徒の育成をめざした探究学習を展開しています。生徒はSDGの視点から地域課題をテーマに設定し、その解決法を探る活動を通して、ローカルとグローバルの両方の視野を広げます。地域の課題解決を探究の柱に据えたのは、地元の次世代リーダー

を育てたいからです。というのも、近年、生徒の地元志向が高まる中、進学先は医療や福祉、看護系に偏り、大学卒業後のキャリアも公務員や医療系ばかりという実態があるからです。しかし、これらの職業だけでは地元は支えられませんが、生徒が気づいていないだけで、地元にもさまざまな企業や仕事が存在し、中には霧島酒造など、グローバル展開をしているところもあります。地元企業の多様性を知り、進路選択の幅を広げてもらいたい。そのため、この活動では、宮崎県中小企業家同友会きりしま支部所属の企業にメンターとして参加し、生徒に助言や指導を行ってもらっています。本年は、製造業や小売業、福祉施設、保育園、弁護士事務所など、45社の協力がありました。

企業との協働の中で 成長する生徒たち

本校の探究学習は、1年次に探究学習の基本的な進め方を学びます。さらに企業人の講演やカードゲームを通してSDGへの理解を深めた後、関心のあるテーマ別にグループをつくり、企業が抱えるSDGの課題を聞きます。2年次はグループごとにメン

ター企業が1社付き、その企業のSDGの課題解決に向けた具体的なアクションまでを考えていきます。基本的に教員はあまり手助けせず、内容からプレゼンのしかたまで、生徒と企業が進めます。仕事を持つメンターとのやりとりは、主にはチャットで行いますが、普段おとなしい生徒がチャットだと積極的に質問するなど、授業と異なる姿も見られています。2年次の最後には成果のポスターセッションを行い、メンター企業から評価を受けます。希望するグループは、3年次にみやざきSDG教育コンソーシアム主催の探究活動発表会に参加します。これに向けて内容をさらに深め、プレゼンの改善を図ります。

研究発表を積み重ねるうちに、内容が深まり、生徒は人前で堂々と発表するようになっていきます。メンター企業からフィードバックされた内容について、その都度、追加調査するので、回を追うごとに自信がつき、自分の言葉で伝えられるようになっていくからでしょう。中には海外の高校生とテーマについて議論したり、英語でプレゼンしたり、PR動画を制作したりするグループも現れ、成長ぶりに驚嘆しました。メンターとのコミュニケーションは、

都城西高校の探究学習

(2020年入学者の例)

| | | |
|-----------------|--|--|
| 内容 | 1年次は探究の進め方やSDGsについて学習。地域の課題を調査するグループワークにチャレンジ。2年次はSDGsを切り口にした地域課題の解決に、メンター企業と協力して取り組む。希望者は3年次に外部の発表会に参加。 | |
| 対象・期間・時数 | ・全ての生徒が1・2年次に履修 ・「総合的な探究の時間」(週1コマ)を活用 | 体制 ・探究プログラム開発推進委員会(7人)を中心に実施 ・県の中小企業家同友会と連携し、企業の協力を受ける |
| テーマ例 | Let's削減食品ロス～手元から作るみんなの幸せ～/お隣さんは外国人!～外国人が住みやすいまちづくりを～/婚活と街のつながりを深く!～婚活につながる第一歩!～ など | 評価方法 ・研究の手法や論理性、ポスターの完成度、発表のやり方などを教員とメンター企業が5段階で評価。生徒同士も相互評価 |

プログラムの3年間の流れ

| | 1年次 | 2年次 | 3年次 | |
|-----------|---|--|-----|--|
| 内容 | 「探究とSDGsの基本を学ぶ」 「グループワーク」 ・テキスト「探究ナビ」を使って課題の設定、調査の手法、分析・まとめの方法を学ぶ ・企業人の講演やカードゲームを通して、SDGsの考え方について学ぶ ・関心のあるSDGsのテーマごとにグループをつくり、企業のSDGsの課題を聞く | 「地元企業と共にグループで地域の課題解決に取り組む」 ・グループごとにメンター企業が付き、その企業の課題解決に挑む ・メンター企業に協力してもらいながら、調査、分析。研究計画発表、中間発表、最終発表に向けて、さらに調査・研究を行う ・希望グループは3年次に「MSECフォーラム*1」での発表に向けて、追加調査を行い、ポスターの完成度、発表の質を上げる | | |



(写真上・左下)1年次のSDGsカードゲーム。企業人講師のもと、価値観が異なる者同士でいかに目標達成に近づけるのかを体感的に学ぶ。(右下)2年次のグループワーク。関心のあるSDGsのテーマごとにグループをつくり、企業のSDGsの課題解決に挑む。

*取材を基に編集部で作成。

保護者や教員以外の大人と接する貴重な機会にもなっています。メンター企業側もメリットを感じているようです。「高校生の意見は商品開発のヒントになる」と、他企業に勧められる会社もあり、協力企業の数、業種が拡大しています。

**生徒の変化で感じた
授業の再構築の必要性**

成果は、教科の授業でも見られます。探究1期生の3年生は、教員の問いに対して情報を解析し、論理的に答えるようになりました。2年生だと教科書から解を探して答えるレベルなので、これは大きな変化です。探究の実績を使って、総合型選抜に挑戦する生徒が出てくることを期待します。変化を目的に当たり前に、教員側も教科書に載っていることを全て教え込むだけの授業を改める必要性を実感しています。それでは生徒の中に内容が深く入っていないし、共通テスト導入以降、暗記中心の授業では、生

大学への期待

理工系の大学こそ 高校の探究に協力を

探究のテーマにサイエンス系を選ぶ生徒が少ないのが現在の悩みの一つ。そこで、理工系の学部を持つ大学と連携して、理系の生徒のニーズも満たせる探究を実現したい。探究で培われた興味・関心と、大学の研究との結びつきが具体的にイメージできるようにすれば、生徒の大学選びも変わってくるでしょう。

*1 探究的な学びの普及・推進を目指した教育コンソーシアム「みやざきSDGs教育コンソーシアム」(Miyazaki SDGs Education Consortium)が実施するフォーラム